



リヴァプールサポーター、アウェイの旅!

～サポーター、マティアス・ムアンジェの場合～

アウェイに乗り込んでくるファンは コナサポーターばかり

マティアス・ムアンジェはリヴァプール・ジョーン・ムアス大学で生体物理学を専攻する23歳の熱狂的なレスズ(リヴァプール)ファンだ。05-06シーズンはホーム・アウェイを問わず、リヴァプールのほとんどの試合に駆けつけ、プレミアシップ38試合のうち、見逃したのが「バイトのため」に足を運ばなかったアウェイのアストン・ヴィラとバーミンガム・シティ戦の2試合だけだ。ちなみに04-05シーズンは、1試合も欠かすことなくスタジアムにいったぞうだ。そんな彼が、アウェイ戦の旅について語ってくれた。

オレが初めてリヴァプールの試合を観に行ったのは、1994年12月のマンチェスター・シティ戦だった。アウェイの試合に初めて行ったのは97年8月のブラックバーン戦。子供の頃はなかなかスタジアムに連れて行ってもらえなかったけど、ここ6年はホームとアウェイのほとんどのゲームに足を運んでいるね。

オレみたいに若い奴は時間がたっぷりあるし、お金だって、夏休みの間は毎日働いているし、学校があるときもバイトをしているから、全く問題ないよ。リヴァプールを追いかけると、もう中毒みたいなのなんだから。

オレはコップ(リヴァプールの熱狂的なサポーターが陣取るアンフィールドの一角のこと)のシーズンチケットを持っているんだけど、アウェイでは全く違う雰囲気を感じるね。レスズサポーターの数は限られているし、スタジアムの片隅に追いやりされてしまうから、肩身が狭いのさ。プレミアシップのゲームでは、アウェイサポーターに割り当てられる席が少なからず——スタジアムのキャパシティの10パーセント程度、あるいは3000人くらいだろう——みんなが一致団結し、大声を張り上げる必要があるのさ。だから、アンフィールドにいるときよりも、自然にいろんな歌を口ずさむんだよね。全く新しい歌を歌って、受け入れられるけど試すことだってよくあるよ。それにアウェイの試合に駆けつけるファンは、リヴァプールのことを知り尽くしたコナサポーターばかりだから、彼らと話すのはとても

楽しい。アンフィールドの場合は、年に2、3回しか足を運ばない奴が多いから。

あと、オレは大きなグループで移動するのはあまり好きじゃない。サポーターズクラブが専用のバスを用意しているらしいけど、使ったことはないね。アウェイゲームに出かけるときは、いつも一緒にチケットを買う5人の友だちと出かけるんだ。その中の1人がクワインって奴がいるんだけど、そいつとは11歳からの付き合いになる。学校が一緒だったんだ。あと2試合だけだ。うちの試合は04-05シーズンは、1試合も欠かすことなくスタジアムにいったぞうだ。そんな彼が、アウェイ戦の旅について語ってくれた。

アウェイゲームに出かけるときは、前日から準備を始めるんだ。あらかじめ飲み物を買っておき、冷蔵庫で冷やしておく。プレミアシップの伝統でもある、キックオフが土曜日の午後の場合は、当日の朝5時から6時くらいに起き、電車の中で食べるサンドウィッチをもつて家を出る。一番大事なものは、試合のチケットを忘れないこと。最悪、家のカギを忘れてもなんとかなるが、チケットを忘れたらどうしようもない。

その後は、駅で待ち合わせしている友だちと会って、電車に乗り込む。車中ではもちろんアルコールを飲み交わし、目的地に着いたあとも、どこかパブを見つけて一杯やるのがオレたちのいつもの行動パターンだ。どのスタジアムへ行っても、最低1つはアウェイサポーター用のパブがある。その他のパブにはたいてい「ホームサポーター専用」という貼紙が貼ってあるよ。試合前、レスズファンと合流し、大声を上げながら、気分を盛り上げていくのは最高に気分がいいものだぜ。

スタジアムの中に入るのは、キックオフの10分から3分前くらいだね。試合が始まってから中へ入ることもある。スタジアムの中よりも、外で飲んだり食べたりした方が安上がりだからさ。勝敗に関係なく、ゲームが終わったあとは、ビールを飲みながら、ゆっくり時間を過ごすようにしている。試合内容を振り返ったりしながらね。レスズファンだけじゃなく、相手チームのサポーターと一緒に飲むこともある

ね。あとは時間を見ながら駅に向かい、電車に乗り換えて家に帰るだけだ。

ホームとアウェイのゲームに違いを感じるっていうのは金のかかるものだ。まず、コップのシーズンチケットは550ポンド(約11万8000円)以上もする。それでもアンフィールドの他の席に比べれば、一番安いんだけどね。でも、チャンピオンズリーグなどのヨーロッパのゲームは余計な出費がかさむ。ホームゲームは1試合30ポンドだ。プレミアシップのアウェイ戦は25ポンドくらいからだが、チェルシー戦は一番高く、48ポンドもする。もちろん交通費もかかる。オレは学割を使って安い切符を買ったことができるけど、リヴァプール・ロンドンのスタンダードな電車の往復運賃は58ポンドもするんだ。

プレミアシップのチームの中でオレが一番気に入っている場所がニューカッスルだ。ロンドンやマンチェスターでは、オレたちは嫌われるけど、ニューカッスルはなぜか居心地がよくて、地元サポーターたちとも一緒に飲んだりするんだ。海外で言えば、ポルトガルとドイツもよかった。街を散策して、ビールを飲んで、試合後にまた街中に戻ってきて、みんなと盛り上がる。最高だったよ。

逆にイタリアの印象はあまりよくない。空港へ着いたとたん、警察の尋問を受けるし、街中も警官に声をかけられる。スタジアムの中にも、相手サポーターから物を投げつけられることがある。最悪さ。

アウェイの旅で一番楽しいのは、やっぱりリヴァプールが勝つことだね。最大のライバルであるエヴァートンのホームスタジアムのクディケン・パークでは、ここ5年くらい満足のいい結果を残していると思うぜ。エヴァートンファンが肩を落としてがっかりしている姿を見るのが何よりも嬉しいのさ。グッティン・パークに出かけ、勝ったときはアンフィールドまで歩いて戻り、スタジアム公園で祝杯を上げるのが恒例になっているんだ。マンチェスター・ユナイテッドやチェルシーという強豪チームを負ったときも、気分は最高だけれどね。マンチェスターへ行ったときは、ユナイテッドファンと間違えられるのが嫌だから、すぐにリヴァプールへ戻ってきて、行きつけのパブ

1人の熱狂的リヴァプールファンにスポットを当て、アウェイに乗り込むサポーターの旅の醍醐味を語ってもらった。チームによって捧げるほど熱狂的な後は、試合があればスタジアムまでの道のりを調べて前日から旅の準備をするという。そして、アウェイの地で最高の勝利と思い出を求め、ムアンジェは今日もまたアウェイの旅に出る——。

●サイモン・ハート 写真ニック・ライアン 翻訳田島大(Footmedia)
Text by Simon Hart Photo by Nick Ryan Translation by Dai Tajima

ビールを飲むようにしている。 チャンピオンズ優勝が決まったとき チームアザだけになるまで騒いだ

ヨーロッパのフットボールで一番印象に残っているのは、04-05シーズンのチャンピオンズリーグ決勝トーナメント1回戦のレヴァークーゼン戦だ。オレたちはいつも、特にゴールが決まったあとは、大声で歌を歌って、雰囲気盛り上げようとしていた。その日、レヴァークーゼンがゴールを決めたあと、スタジアムにステイターズ・コーズの「ロッキン・オール・オーバー・ザ・ワールド」が流れたんだ。でも、そのときオレたちはすでに3-0でリードを奪っていたから、レスズがベスト8に進むのは確実だった。スピーカーから音楽が流れてきた瞬間、盛り上がったのはホームのサポーターじゃない。オレたちリヴァプールファンの方で、一斉に大声で歌を歌い始め、盛り上がったのさ。その後、少して会場が静かになると、オレたちは「ロッキン・オール・オーバー・ザ・ワールド」を歌って盛り上げた。試合が終わっても、警官やレヴァークーゼンサポーターに向かって、歌ってやったものさ。その夜以来、「ロッキン・オール・オーバー・ザ・ワールド」は、オレたちリヴァプールサポーターの持ち歌の一つになっていったわけだけど、きっかけはこんな感じで、とても面白いものだった。

最高のゲームと言えば、2005年5月のチャンピオンズリーグ決勝だ。イスタンブールでミランを倒して優勝した夜は忘れられない。大団圓って言うのは、オレたちから見てヨーロッパの一番向こう側に位置していた、たどり着くまでが大変だった。みんな車で大陸を横断したり、何度も飛行機を乗り継いで、イスタンブールへ向かったようだ。オレの場合はマンチェスターから飛行機でアムステルダムまで行き、そこからフットガルトを經由してイスタンブールへ入るという長旅だった。それでも他の連中に比べるとまだマシな方で、安上る代わりに、もっと複雑なルートを使ったファンもたくさんいたよ。

タクシム広場はまるでリヴァプールの

ホームゲームみたいで、レスズファンで溢れかえっていた。イスタンブールには5万人を超えるリヴァプールファンが詰めかけていたって聞かれていたし、確かにミランファンはほとんど見かけなかったね。

スタジアムまでの道のりも楽しかった。郊外にあっただんだけど、スタジアムにたどり着く道が一本しかなかったから、キックオフの3、4時間前には出かける必要があった。それでも、リヴァプールのマフラーを巻き、フタを開けて大勢のレスズサポーターたちが、スタジアムに向かって一直線に真っ赤な列を作っている姿は圧巻だったよ。

スタジアムの中も、4分の3はリヴァプールサポーターで埋まっていた。観客席のあちこちに赤いユニフォーム姿のファンがフラッグを振っている姿は、興奮を感じるほどだった。あの雰囲気は現場でいた者じゃないと分からないだろうね。オレのちょうど真後ろにいたファンが2人、フタを開けてゴールを始めるようになったんだけど、優勝が決まった瞬間は、まるで結婚したばかりのカップルのように抱き合って、キスしていた。ただ、ステイヴン・ジェラードがゴールを決めて1-3にしたときさ、リヴァプールファンの中で、優勝すると思っていた奴はほとんどいなかったと思う。大騒ぎはしたが、それはチームに対する同情心みたいなものだった。でも、ウラディミール・スミチェルのゴールで2-3になったときに歌った「ユール・ネヴァー・ウォーク・アローン」は今でもよく覚えているよ。1点差になったときは、みんなが「行け、リヴァプール、絶対に勝てる!」って信じていたはずさ。

3点目につながらPKを獲得したとき、オレの友だちのウォルシーは、捲くて目を背けていたよ。シャビ・アロンソがキック体勢に入ったとき、ウォルシーはオレに背中を向けていたんだ。アロンソがPKをミスした瞬間、彼は肩を落としていたが、アロンソがリバンドを決めたときは、オレに抱きついてきたんだ。

優勝が決まったあとは、興奮して大騒ぎしたから、みんな身体中がアザだらけになっていたね。オレ自身もしばらくは喉がガ

ララうだったよ。みんながそうだったから、試合後に歌を歌える奴なんかいなかった。帰りの空港では、あちこちで「リングズ・オブ・ファイア」の口笛が聞こえていたのをよく覚えている。イスタンブールではその曲が非公式のクラブソングになっていたさ。レスズファンが口笛でその曲を奏でると、別のレスズファンが同じ口笛で返し、5本の指を立てて応える。つまり5回目のヨーロッパカップ制覇を示す、といった具合にね。口笛だった理由はもちろん、みんなが湧れて、歌が歌えなかったからさ。

翌日、リヴァプール市内で行われたパレードは盛大なものだったよ。75万人の人々が駆けつけたんだ。リヴァプールの市街地はその日、ほとんど身動きが取れない状態だった。そのシーズンはチェルシーがプレミアシップとリーグカップの2冠を達成したけど、沿道に集まったのは20万人、パレードも1時間30分間で終わらしたらしい。オレたちのパレードは2時間で30分の予定だったのが、5時間に延長されたんだ。本当に最高の一日だったぜ。

■プレミアシップのアウェイ戦の日帰り費用
※今シーズン、リヴァプールファンがチェルシーとのアウェイ戦を観に行く場合、その費用はおよそ下の通り。

- 試合のチケット……………48ポンド
- 電車賃(スタンダード料、リヴァプール-ロンドン往復)……………58ポンド
- 電車内でサンドウィッチとティード……………5ポンド
- 試合前のビール(1杯)……………3ポンド
- マッチデイプログラム代……………3ポンド
- 帰りの電車内でティードとお酒……………3ポンド
- 合計120ポンド(約2万6400円)